夕の雲

はまべ　第二

哥と詞を書きそへる

[v. 4]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 4
copy1
Asian
Japan
case

2004551302

六条わたりの御忌日（源氏）

六条わたりの御忌日

六条わたりの御忌日

六条わたりの御忌日

六条わたりの御忌日

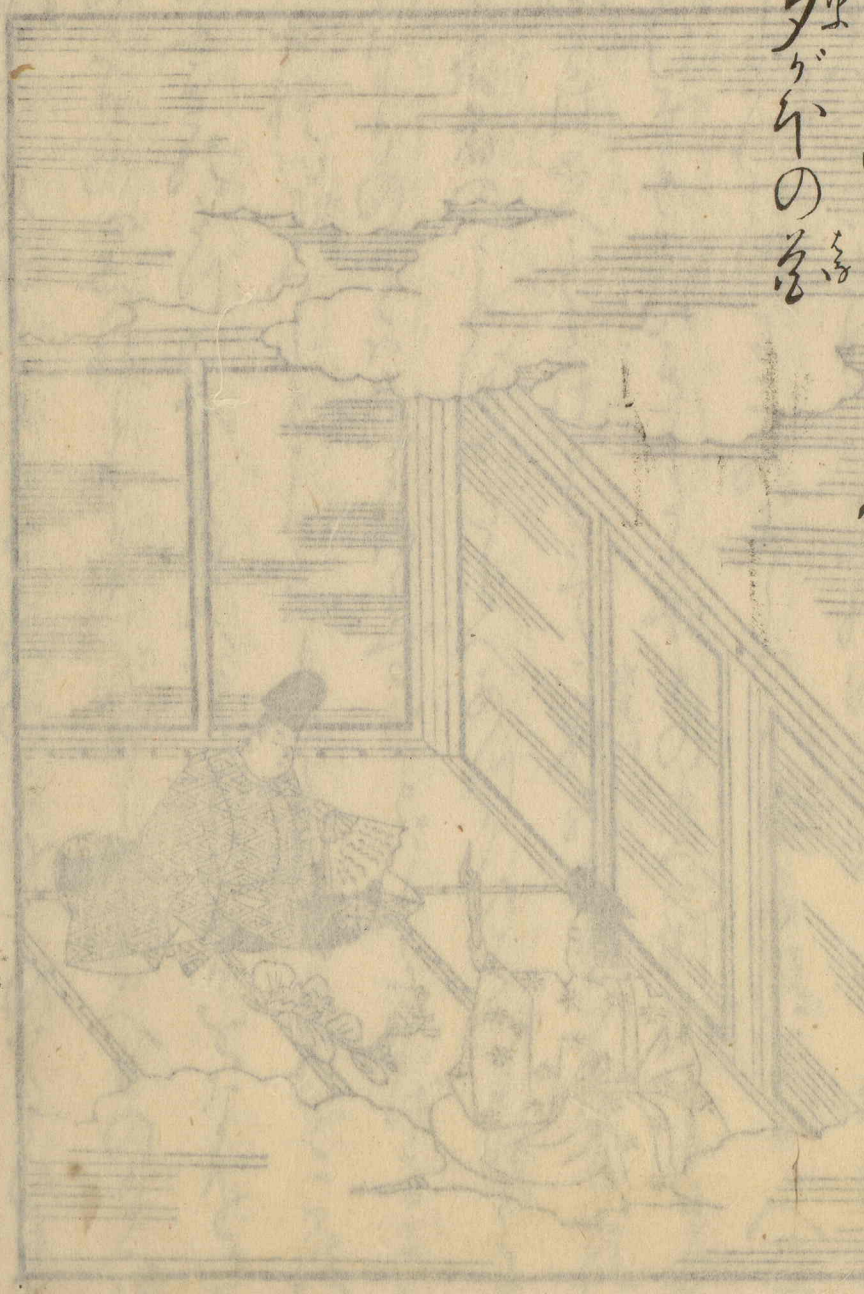
ゆらぞすらいうるもみちつどへかなんとやう
ぐるりてお[illegible]さるゝ車もいくそやはしまへ
さるもとそ名そず誰(れ)とうちとけの
てすゝきのそきまへれぶどいふとこれやう
なとをなにのまことこれの有るくものくれ
さすまるとあれ(あれ)ばかりてとおもはしなせば
ゑのうてなもおれどなりそうけぶるも
なあとやうるづのゝちとげよそひれ
ふよゝろさそ(そな)ゝのれひとうるこれまひう
けう

源氏
そちらこちらべなおやとひとりごちてまをさ
ばんじん
随身ついおてぐしたうてさしなんりなどかと
ゆかしがるをの名いひとあてがうあやまちさえ
なんさしかけるとげよいとに家ごちるもけ
うげるわうりのこれ心面枕面もあやまちおちる
ぼひてひのくまちあのさまつまごとをひろ
源氏
くれをロおの花のちごうやひとふさおりて
侍男
よいれとの給へごのまあけさ門よへておる
さすごよざれうやと戸口よさうすくしのひ
とへごうまなごくさうわうくのおりげ
なるをそてごちまのくごうる扇のいうてご

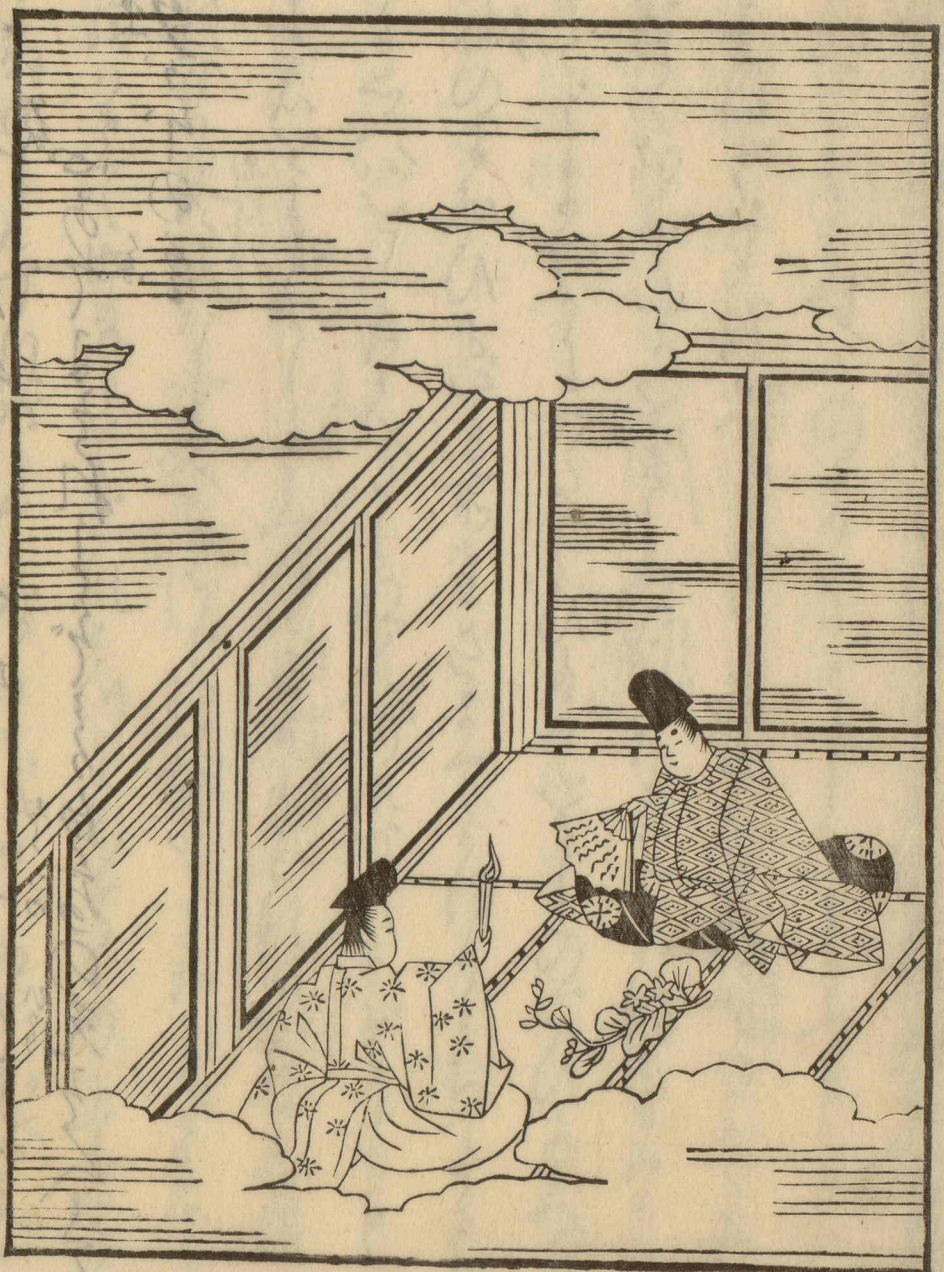
さまひかんぜさうくしきものうそうり物りなん
こそ候へうちおこう思ひまへうへ申こそひしうぞいむ
こそれこそうしよりみぐしおろしてなんぐくわうりおは
しますをこそ給(たまひ)ぬれ(ば)(ま)なんあうぐ佛(ほとけ)のれひう
ましふぐうくまうれ物べきなどうそうしてうは
げ(ほつ)なく日ごろそうぐくものをうくをや
すうざなげきわうりつうくせをそうるうくき海
よもれしものへいと希(あれ)こそちおしうなんいのち
なうくて行(をこな)ひうくなどもうるしものへざうそうそ
のこれ(はのイ)のみよもさうなくむもれ給へあは
せはすうこうこのうへいろさわぎてなんそう

なで周ぐるぐるの行ぐるぐるとぐるぐるめぐるやうの
さまざまの人のあるさまいろいろなるをおもひやりて
ていとおもしろうおもひつづけゐたるに
いとうつくしげなるひとりごとをいひゐたるを
なにごとぞとおもひゆくべうめれどすぐろ
てそのさまのやうをやうやうにかきつづけゐたるを
ひとりのをんなのこれをみつけてうちひめぐりて
そのかみはいと哀とおぼしていたりけるほどに
さまざまの人ぐのうちすてつゝものしりのひとりけるかた
ぐりそぐむ人あまたあるやうなりしかどもいとうつくしげ
なるひとりごとをいひゐたるをなにごとぞとおもひ

ほしくひとりてはごぐりあれば紅夕
もえそまず心のまもるとみてひまうつることい
なれどなほ久しうしいめんもあ時ハこころろ
ばそくおでゆるさるあ別ハたくもぐれとなん
なぐごものやうかうひのそこのごひのる
れ袖のそひおいとあをさまでうゆりこちする
げよこへばそうなべうあ人のれすくもぞうと
なまぶをもどうとみつごぬもこれうちを月
これり修法(修行ずゆう)などえこそむべきことなどときて
の給ひをてせのよてこれこりよもそくめてゆり
つ窮ゆうんずればよてなうろうつり長ごと



おもひあまりなんとしてかおもひそめけん
心あてなるそれとこそ白露の光そへける
夕がほの巻



添心
そこここととなくくさまざまつくろひ。あてはな
よゆへづさされいとぞ見ゆるおうちうばえ
のおほ添汁れこれはこみのうなる家のほなるべ乃
まもむそとさひろてうりやとのおへ所のうさる
れふとはやへどさはやさで。北光汁ふみ六日こるよくぐれ
ど。病者のこととはせまうへありひとぐるほどな
となりのこといえ笑ひなどりしてまげるる
こゆえいよ添汁うととおもひされる。されどこれ
あふぎみびめべきねへりてこゆをなをしも
あるうのふこれんものびめてとへとのの公
惟光いりてこのやどもりなるおのうをとびてとひく

惟光汁　三ケのこ

やうめいのそけなるくの(人)ありけるおとこ
しみ平まりてめなんわくことのそてむ
らくなどそへつくへてきゝふとゝ沢こそ
ゝさことゝもひとのえゝりおきめやあんと
ゝさゝの(涙汁)そのそへつくへなゝもゝりてゝ
おなれていくるかて笑ざ後しうべきなる
やあんとらばをど(地)さゝてつゝ(きゝ)れゝゝろ乃
まくうずをぐゝれぞ(き)いのこれくまた
おもゝあれ心なあゝうれたうぐみよいうあ
らめさ後ようさうへなて
(涙)りてゝてをれゝもそえゝそれは(涙)の

ばのうつるれのタぐれ（ミだれ）ありつるれ（ミだれ）風（ミかぜ）ふ
つるに（ミも）まぐるめれる海なりれど（ミとも）とく思
あてれのへるぶれそだめぬるすぐさで（ミなど）ろ
うけるをれいへまるく行へれぐおまろる
なるさるくわざとめりれ（ミれ）ばあまえていうるる
こんなどいひろうべめれど（ミ）笑（ミ）ざ海（ミ）と
もひて（ミ）風（ミ）まいりめれ（ミ）さるまはかのうまて
いくさのびて出（ミ）るぐとみおろるぐう
ひまぐうろうるめ大のひろ風（ミ）ろうけるは
のうる哀（ミあれ）なり（ミ）れ心（ミざ）の面（ミ）まこぐちもんさい
なぐなべての面（ミ）にぞいとのぐるろうて

すこなるものゝうちにもめれ（添心）（見）（ありさま）なども
さることなるもありつゝさればかゝる（くだくだ）ことは
あらざらん（ほ）ぼとあてすさまじげなれど日さし
出るほどいそぎまゐりぬ。あるじのおとゞすでに
めでさわぎたまふ。もゝとりなどいふ海女ども
こぞとゝのへまゐらせたるさまなどいとおもしろ
けれどなれどゞゞつるさまをみてはこゝろ
とまりているる人のすこうなることゞゆさま
ゝれ
れめとまり給ふ。権（れう）亮殿ゞゝありてまいれり。
権亮（れう）
わづらひ給ふ人なればとゞめ給はれどとくこのひ
あけてなんなど実てらくまでうちふして寝ぬ。

ねをそれ〳〵ねなんどそろうのこそろうて仰もの。
そびてそそを仰ごご。そうぐこそくもア仰ごご。
いこそのびてさつきそれこそろはひそうもの〳〵仰人
なんあうべそれごそれ人といさそそる家のそうの
人へうぶこそれずとなんア。はご中垣のういまうこ
仰るよげよりさあごものすさうげこそ仰こそびう
ごろもれぐぐうりひさうけてうづく人仰な
めり。昨日夕日のこそうなくさこへて仰こそ。
ふこうくそそおそ仰こ人のねこそいとうく
仰ごおそくるけこひこそおそ人でもこのびて
そうなくさ後でとなんこそくこそ仰うとそさを。

(旁)
まんうち五こゑひて、そこばやとおもはしう。(地脱光)
うこそおもふべきされ分のほどなれどれうひの
程人のなびさめでゆくうき限などそうはすゝさ
治はざらんもなきけなくさうぐしうるべし。
人のうけひうあはどまでぐなはさうめべき
あるうのことにこのまうおぼゆるものをと思
とうまし(脱光)このへうこともやおうなどそうるさ
つあでつくりいでをそこなどつけしうさ。
うさなれうまて(侍)そうちくもするなぐし
さいでくにおうういあうめわうへどもなん治うめうと
きこゑ(旁)れバ(そと脱)れのひれバぐのそでいさうぐし

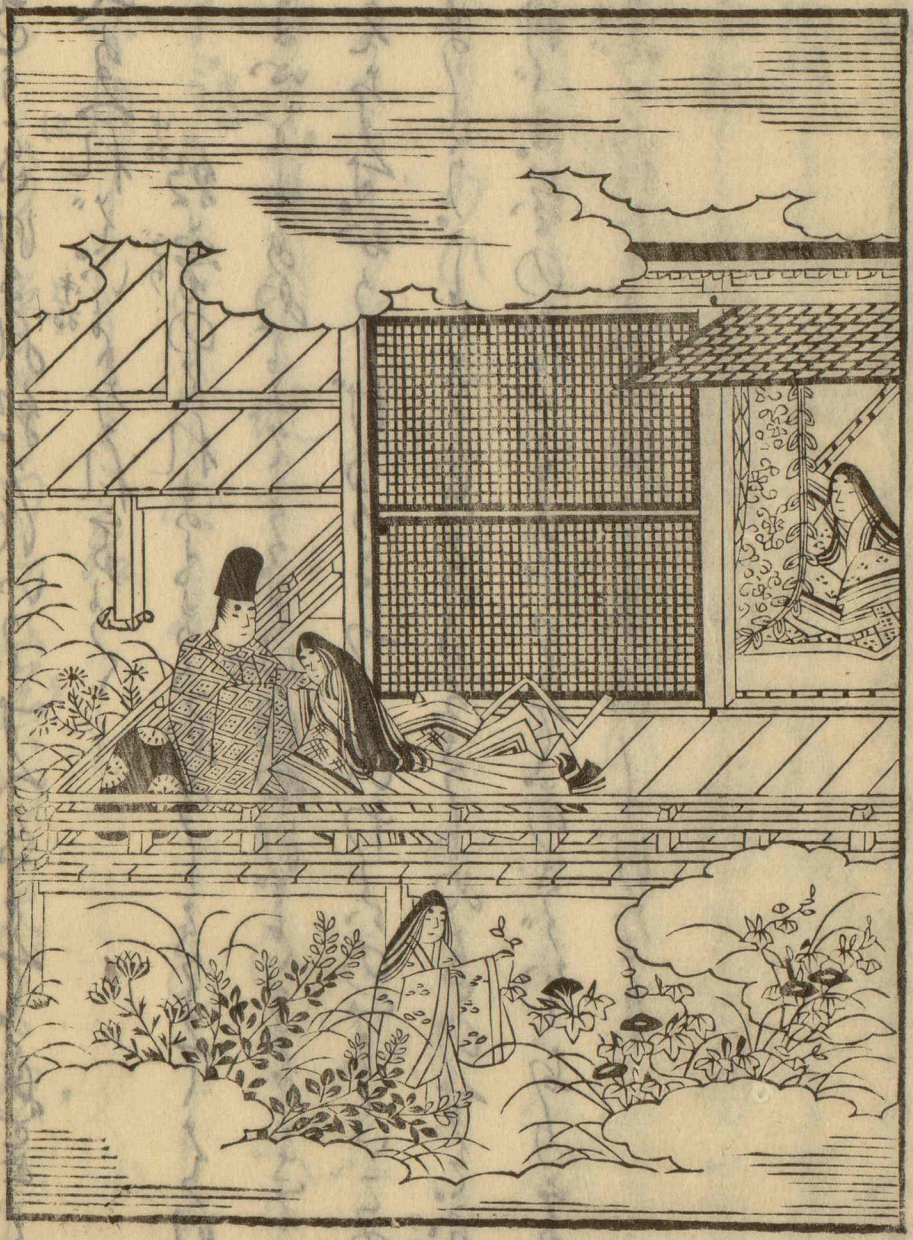
りなんとのたまふ。(添心)されどもなほひおとこすすまぬなれど、それ申しもやひのほうるくちおしうおもほさるべきことなどうけたまはりさだめて、(うせ)蝉のあさ顔さうつれなさうに、この世の人のほどびておぼすよおいらうなるまでうばふべきにあやまちてもやこぬべきぞいとねたくまけてやこんなんをふるうこぬおりなり。(地)やうのなるくまでいかおもほしうるざりつるにあり(あま)あはのかうぶりあれ(のち)うしくおもほしなる志れぐのあるよいとぐくまるくなりぬれ(と)ころなありうしうるく

まらぬ（ぎ）ごとなるべきつるの人と（彰考館蔵）（あれ）ばおぼさ
るるもあれど（ど）それなくてさみしかるべきことの
そばにそれがまぎれもなくてさみしかるのこころにて
おぼさるる（よ）伊与のきみけのそらめまがいそぎもの
れうにかこちのきわざとてずうろうろやつれる
様（さま）すぐるいとうつくしうしづかなるさまにて
やうやうあすぐよりこちなどのびれどきこえ
ぬべくなりぬるこそうづなどぞありけ（け）る國の和泉（ものぐろ）
なども（ども）ゆげ（げ）しくいとどなまし（しほ）くおぼえ
おひなくものびゆくてれ（に）ころの中（うち）るおぼ
しけることどもおもひやうなるを

おとるまじく思ひげなるおこゝろもちにて
わざなりやげにされぞそれめなどめでたき
とむまうのうちのいさゝかおぼえいでたるを
つれづれさうしにかきあつめたるを（あれ）
なぐさむ（徒然草）すゞろごとなどさるべきひとにたのみて
おかせてごらんじめぐりてとかくのよびとさな
らのこゝろあてにこゝろにくゝ今一ところいひあてまほ
しとやとこゝかしこにひきちらしたるを（とが）
あつめてせんとてまめやかにうつしもえし
もまぎれおほかるほどにまうでつかうまつるさまよく思
ていまさらにかゝるべきにはあらず

みうらし一万にのぞまでこそまうりもとりのぞへと
おぼしくれさき花ひさやうれいれんくまでぎて
こと也しのぞへり前栽の色こそぐれうをうごてよ
やすらひのへるさ夜ばげるたぐひるまでらうのうこへ
おぼするまでは中将のまれとまるまうぶをん色乃
おりまあひうさすものもおぼやうまひさゆひ
うこつきさいやうまなまあうさうこうへり
のてすうのまれうらんまぶのさすへのま
ぶ中将うちとけうこあまてなてうこのうぐりぶ
うぐ夜しくまでこそ
うへ宮まうつてちいつくえんぶまあうて

過うきけるよ多くは、いでずべきやうにへなれど、いとくなれるよく
勢雲のそれもまもるあらしをそれ
ふとゝめゝとぞ、おもやげとうぞえなす。おうげるうふひわふのすぐるみ
まうふとさゝめさゝろうめさのすて、
けばよのなるまでつて、あさぎりまいまう行などゑうくまはしげなり



地添ノ折ノ本

心もとなきことなどをのべうめりまことやこれ惟光が
あづかりのいまみまいとうくあかいことなりてよ
惟光朝
それ人とはさることもよりおほすべくくる
これもとづくりそなんことおをつれづれなる
まゝにこれをのそくことあるなど中将長雨
つゝ車のおとをれバわれもものぞきなど
すべりめるこのもうとおぼしてそひわる時
をべうめるこちなんはのうなれどいとらうびた
き一日さることをひてわる車のえべりーを
のぞきてわるべのいてぞてをのおこそまゝ
ものへ中将朝臣もて光これよりわりおぬれとい

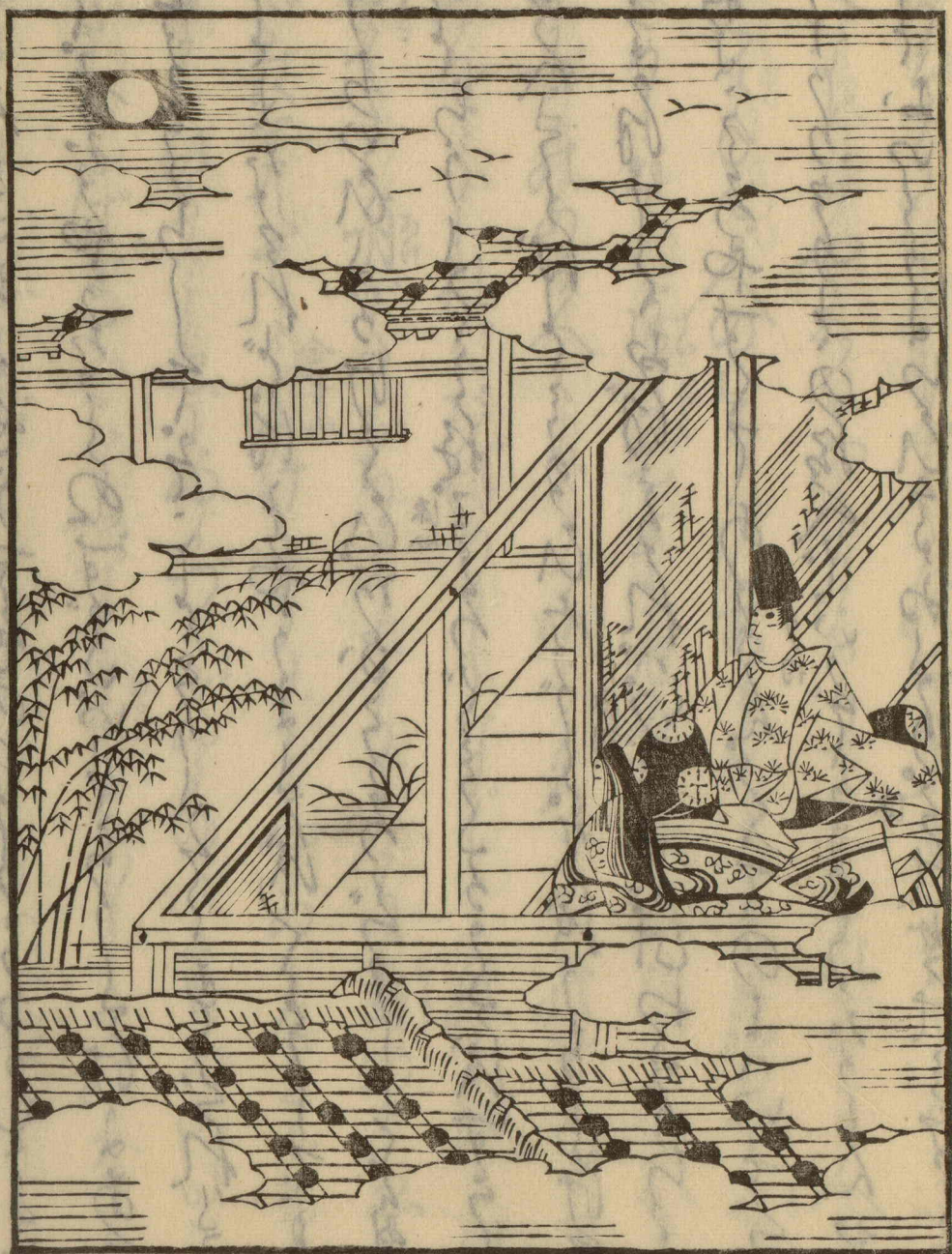
まろうどもとりあへず出でて、おのおの物とりいそぎはしりもてゆくほどに、うちはしぢかきもとにてなんどひきべるいそぎ、ろばひきれてゆくもの、荷(に)めべれば、いでこのごろきのうこそ、さうぶをさへこれもいりてものぞとて、ろばもあめり。悪(にく)いぬなどをそ、ただ強力(ごうりき)どもくありしかなどぞへば、京中(きやうぢう)の強力(ごうりき)、それどころわらぢ成なんどもとめいひ持てなどぞゆれば、
（添付）
うちそれ車をとりまきてゆく。

あくれば五月すれば五月雨の空もやうやうおだしくなりぬるもいとをかしうおぼしめしたれ紫色なるに（旧光汚）わたくしのけさうもいとよくしみて、あかいもおうこんもなどいとこまやかにわざとちとさしてものなどいふわたりおもしろきをそらおぼれをそなんいふられもようなりくいとこうくうくうとひて、ちいさきほどもなどのねうがとあやまりしはべるもいひまぎらはして、文人ふるさと陵をもおもてつくりなどくりてわらふ（添汚）あまぞんのとうひなまねよんつあでよいまうせうせとの給ふ。（添汚）うりまてもやどれうすまねの行をいふとこれそ

いとおびうさあ〳〵ものぶそうつけ〳〵れてゐうんは。
うゝそもあうべきうなるわづれど。人(ほ)はこゝせ
ぬるあものくる。それなゐのこうべをゝ随分(ずいぶん)ざう。
さていうかむゞうまこうるものづゝさ。ふうこひとりづゝり
ぞおそおりゝけう。ものゝとひようそゝもやそ。
となりう申やどうとゞよゝ招(ク乳)ぞず。あそいうとあ
やゝ〳〵ゝうめゐちのそゝてゝれつうひよ人ゝそへ。
あう月のうちをうゝぜせれありうゝうもんとう
づあれど。そこはゝとみくまゞりつて。さずゞう衰(あいだ)
ゝそゝいえあうまづく。それ人のれゐようりあ
れゞゞんなくうゞゝうゝもよゐとはゝ

とまるやうでとく、あはすいてとくこゝろもそれ
さうぞくどもやつれこゝろうのれぞ成をもちさ成を
えへうなどもはのこゝろもまゐ東あうさ行よ人とも
びめて出りなどこゝろまへど（夕紛心）受こゝろありけん
ものゝ名んこゝろめこゝろそこゝろひなげうれど人
のれけこゝひこゝろまこゝろにこゝろこゝろわざ成名れど
（有）雅ごゝろりこゝろはあこんれこゝろのすこゝろものこゝろいでこゝろ
わざこゝろありとこゝろいこゝろ（雅光こ）こゝろうこゝろごひなこゝろをあてこゝろれ
なくこゝろこゝろずこゝろはこゝろそこゝろけくおこゝろひこゝろうこゝろあこゝろ成こゝろ
こゝろもまこゝろずあこゝろれありけこゝろいこゝろるこゝろこゝろよこゝろこゝろこゝろ
えこゝろこゝろくおこゝろこゝろありやこゝろうこゝろやうたこゝろひこゝろろあこゝろひと

なんとけっこんしきもあげてくれるようにゆめでうれ
なばいづこをうろうろとうわきものをおもひうろうろ
うろうろとうろうろとうろうろとうろうろとうろうろ
ゆうべ夢をみたとおもふすこしもねむられずそのまゝ
そしてなのある思ひをはべらばぐうぐうの寝
そひうそもすぐあべきことをそうそうよそでずつ
てんとおもはれぬひとめをはばかりへべてもよろ
れてくなどいってそのびっくりしてめをさまし
もはやうつくしきれとるくて二条院へむかへて
んもつれありてびんなうべきことをなりと
おもうべきそれ我ながらもうとうとうとうとうとうとう



ちぐさなどまでこれめのふうちとろ心ぞ
へなどあやちくやうぐちりてぐるれる人ぐも
さくらぐで人のおもてんをえぐぐ名ぐで近衛
をめ出く頭分をめるせのそれ車ひきいれを
のふこれあう人ぐもぐうろだこころぐこれをろう
めをこれぐおぼめぐなぐこれぐ秋うけ
雲ぐう明ぐぐもちうなうよぐう鳥のこえな
どは雲ぐて金峯山ぐうけぐうぐぐのやあんぐぐわる
ちぐびうこうふのめうづぐぐ雲ゆうぐちねのけぐひ
えぐぐげよとこなふぐこと哀あれこれぐう
こなるあせをなよむさぼう男のぐのうよと

岡本

アメーラふなをそうらい導師(どうし)とぞおがむなる。
ほかにたしさまへこの世(よ)とのこくざうそうとあくれぐりのまて

ばばくがをこなう道(みち)をふるべてそうんせもうさちぐりたがふる。衆生(しゅじょう)のつくさふはゆくさんとはひくさんへて弥勒(みろく)の世をぞうのふゆくさんのれーみめいとこちうこ
クそれの世の栄(さかり)ふるうふ男のうふこゆす
えてたのこぐるさようやうのすぢなどもさうくろもとなるめり。いざうふ男よゆくうるくあくがんことめをおまへやすふふとくのうよ

行(ゆく)ゑもなく雲(くも)がくれてあまり定(さだ)なくおぼえて、
よるさはぐなるあさぼらけ、例(れい)のいそぎさへ
てゐるうちのをもへれば、なほそののりめる
のわろうちなるよ(院)れ(院)ばおりまつさへ、
あげりめりいづら行(ゆく)あれどうどのものぶぐ
さぐりてこゐでれどうこへなくこぐ
務(つとめ)もおくつのけてよすぐれとさへあげま
へれば(院)軸(ぞ)もいろうめれよりまぶうやうなる
(院)ことなくぐりつてそろづくしなること
もありけるか
らうへ(院)のまどのけんわざ

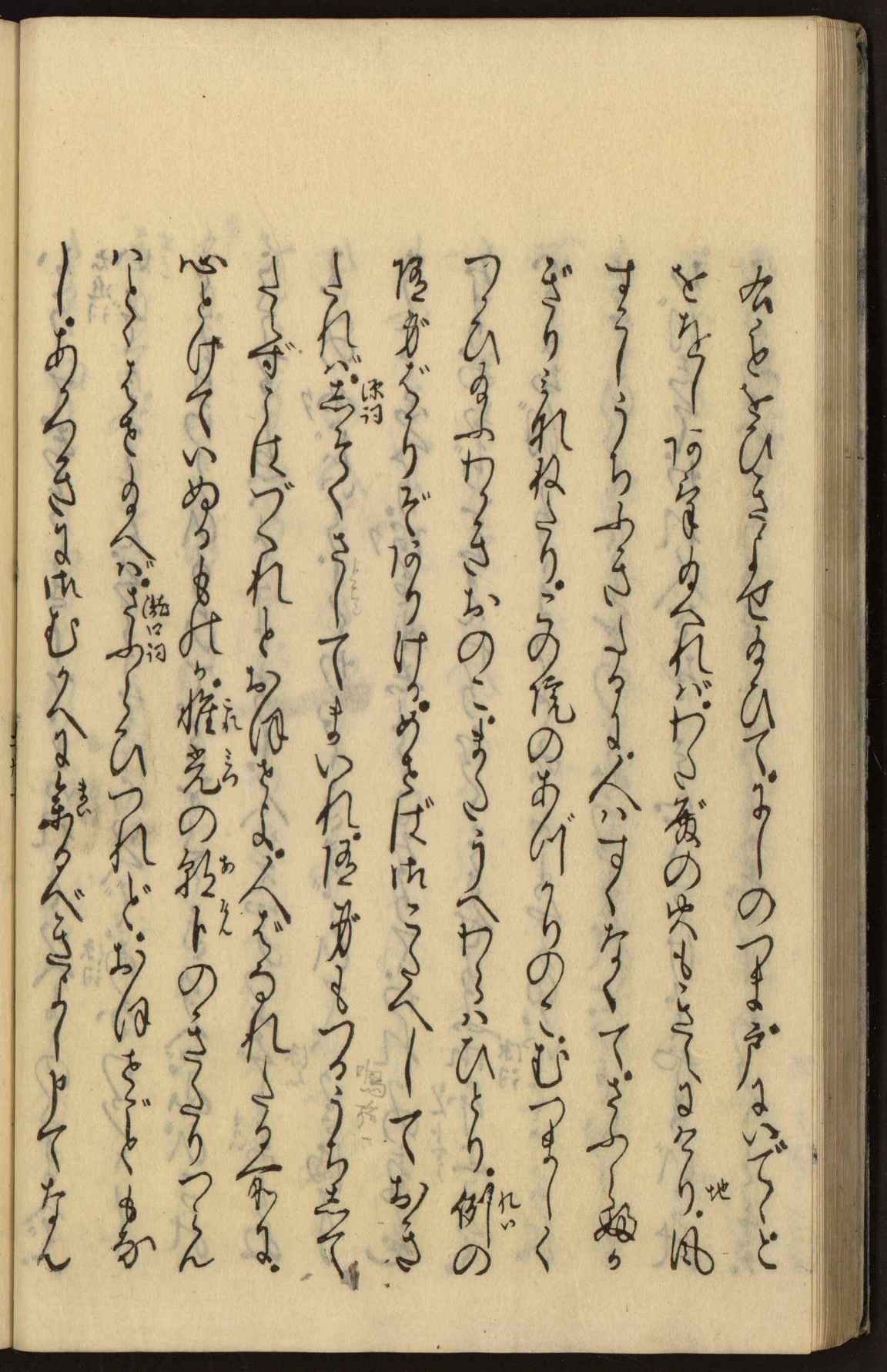
あれて人めもなくころびくところもされてごろ
ごろとうち臥しくもれ出るなみださへ
なでいとこゝろ見えなくこれ秋のゆふぐれ
そゝもこゝろづもれどいとけうとげに
ふかべちなれどなどぞ〳〵などて人すむ
べうもれどこゝろにくゝもけうとくもなりる
けり雨うちそゝぐ夜も鬼などいでゝあそびね
てんとのまゝに臥したれどめのいと
つ〳〵としもねられでけうとうそうそしく
あんまりのさびしさにひとりぬるこゝちして
ゆふべはいとゞかなしくなんおぼえける

しくそよりてけりそれ(源羽)ぞのひろやいうよ
のまへにタもりめよことをそて
ひろありとそ(タ)ーメぐかのうへ家にそれ
はのそらめぬそうとはのまいふ(源)おうーとおば
ケす(比)ばよりそのへるさ風世ななく有うまいそ
ゆきそさまでそしものふつさをず(源汀)へでそのへるう
さよあーふさでとそへるものはいまぶよみのり
ーまへにむそみーとのまにおまれこなれば
とそすぐよそらとりめさ風いとあいぶれそう(源)
それもわれそうなありとそそこそひ
そそ名推(れうぶれ)光彩のこさそてけそぶともなど

まつらす。惟光 なにとういふことかはしらねど
いとくちおしうこひしうおぼえたまふ
ことかぎりなしおほかたにもあはれ
なることをもしりそめたまへる
ほどにこそあれ我いとようさしもあ
はれとおもひそめてふびにおぼえ
たまふ人のなくなりたまへるをも
となげきあかしたまふ
あはれてふ(原)ばかりのすさびごとをも
人よりさきにとこそ見しかおもひ
をばしるやあやなくさはりありて
のちにきこえたまふ

れ、ゐ行をすこしうすくぐやと思ふくれなゐけふこひすゞろほどにすゝねうのくるれまくづるいとおろしげるあをてそのがいと紅でうてとこそものをぞこゝろもなほさでくこととなるこゝろくとゐてをそうてどさめてのみてゐとめざ侍くつゝれとそてこのれらさゝゝの人とうさおそうんとすとこそのおものよをゝこゝろやうてをどろきのこれゞやまこそよろうこそてゐ侍さゝれゞどうちとひさめさてうちをきのてをとをゝこのおこれもおそろうとこひこゝろ侍まてまいうわゝ侍どのをゝとものゐく

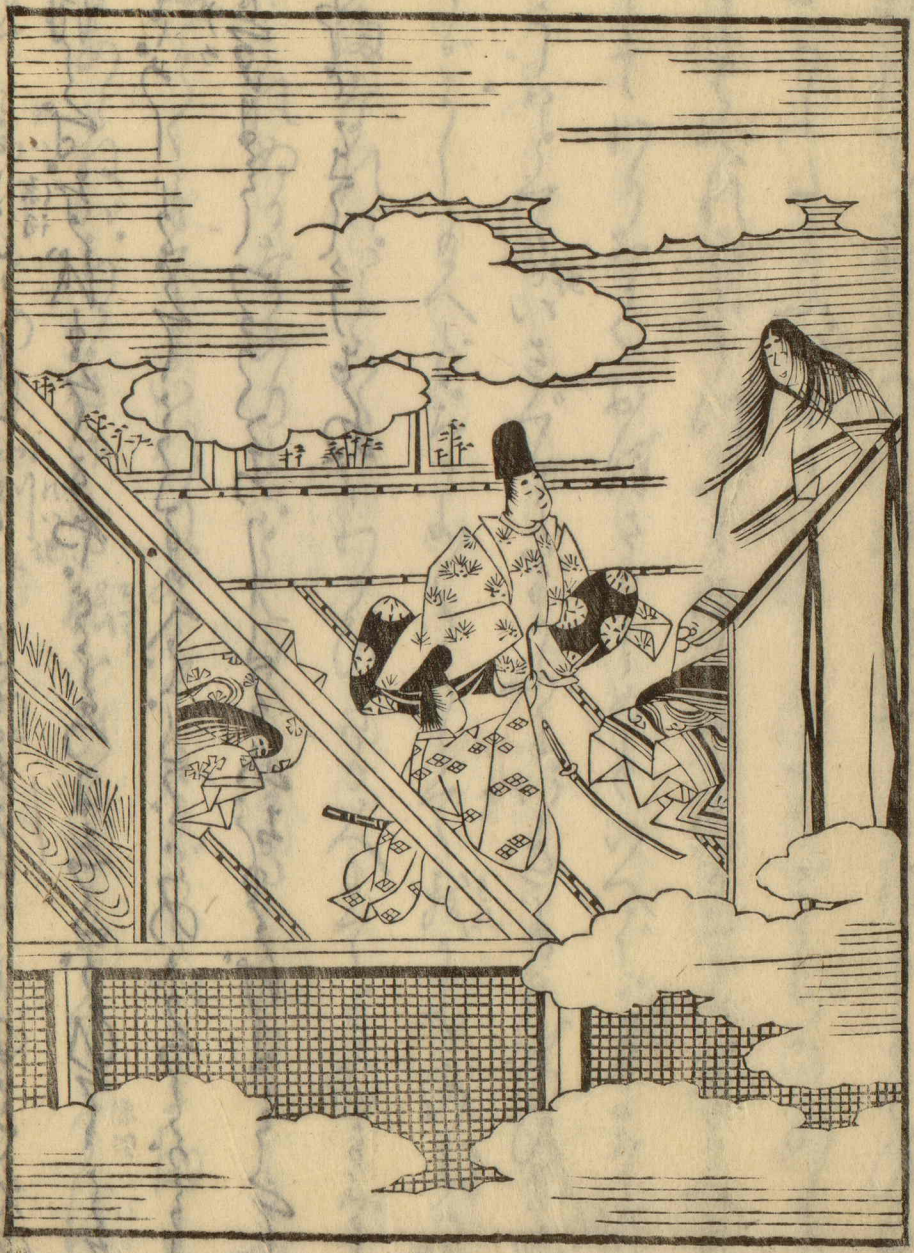
かうして、そこそこまでてまいれといふとのつまうぐ。
いうぐでうまうこんぐうてといふぐで、あかわうくし（去遊汙）（汙）
とうちわつひのひてぞよとてさまへぶみびこれ
うこみうこふいとうとう。人いえやつうぐまいこあ
まこのあぶいうぐくわうてさまぐひていうこはう（タ）（汙ん）
もんとおくり、ゆをもおとくはうてわれの義も
なう。おおぐをまんわりなくをせのみ出年正まて。（タよう）
いうはうぐさうこはうとおとまうみ。いとうう（汙汙）
そひうよそこをのこみつうまれをいとおりて
おぐおそわれ人をおこんてうけぐやまびこれ
うこみういうこう。そこはおぐちくとう。



まで御めしとゞめ給ふ。このうへ申すまでもなくぐらちなりそれでゆづりとつてくくうちなくしてひあやうしといふ。あげうぐざうのつくへはいめうたち(ほん)丙をおびしやりてゐる。いめんはすぐあくん。暁(ぎょう)にのこりのおまうしいうまでもそくをしてそうりのみそまぶいこうみけめまでもそうりいりてさぐりのへべ。あぶいさるぐみて。なをとそうるはるうりがくくうちごさるかぐ。あるまれぐるおしのまれをやおれるかとうろくごろるなどやうのまれくくるびやるんとて。けおそろくう思くすうそうんまろ

あれどさやうのまれなるにかどされてひさ
おこしまゐいでうしてごぢうごろのあし
うちべれだいうりがぬしてゐうちりおまへる
ちそゆりちくるがさうちめよりへでそよちど
うりかとてういさぐりしまゐいうさまをぶひさ
うごうしのへどちよくとうして我まもあしめ
さ海をれがごとくみうびうるへまでまのうを
どれめうちありとさんうるさうさうちしまる
志うくまてまいわうおをもうごくべさう海よ
もあしねがちうされうれをちうてみ代
もてまいれとのまる前みうめこまてまうへち

くえまいらせつりさうげしまもえの
ぼうぎ(傍訓)なんどまでそや。ところまるがひてこそ
とゞめつゝそこゝろのへぐごゝろのまゝにぐうぐうる。
(ゆゐ)
言はまくつゝうちしるあゐをげまこそ。
かとゝさうもの



ねをこといひやりつるこの給ふ（きの）惟光朝臣山へまかりのぼりたりまづいとめでたきことと聞きおどろきて（驚）例なくおぼし心もとなければ惟光（これみつ）

修行（ずぎやう）してありくものなれどかかることもなかりつとてなほさのみ臥（ふ）したまへるほどにもあらず（ほど）

（惟光）

（修行）

（地）

（山）

（修行）

（院）

なりあるうりの人をびをやうよりおれどいてうでうる
作りとうそうそうておまそうそうて行よ此車よう此
この人をえいびうさてうまうまでくれびうはむそろ
はそうくうそうて惟光(これみつ)のをなりいてとうそやううて
うとまうしげもなくらうううびなりぞうくうううよ
えうのびうそうそうびれいでうるもめくれまでひて
あさまうううるうとおびをだなりそうそんうをを
うんとおびをでやれ馬(むま)よりて二条(でう)の院(ゐん)へおりて
まうんで人をだでくぬおりあびでよりて右をよ
そへてのすれびまよむまいまりてびれいうちうり
くうひうあげなどうてだうこのいいうてあや

ろくおぼしめさるゝなれど、これ紙色のいろ〴〵
ござなれば、分をすてゝ、ゆかしいおもえてのつぼ、
われのこゝろをおつゝきこゝろ、人〴〵いづこゝろ
おつゝまするぞ。そやまつげよこえをするなど
のへど、低のうちよりうらやましてひのもとさえて
ちつるいとゝこゝろそれがなどてのりそひてゆる
ぎつゝんいうさゝりこゝろさいうるろゆちもんえ
すてゝゆる別ふろりとうつゝやをそんとゆまどの
の中ともおぼすれしひのをさあぐろゆちをのふ
れどゝもらくすもあろさゆちそてゝいとくろ
くまどそれるくゝるてれもらゝ

とめなどせしかばてんやわんやあつまりきてこゝかしこにてんでんにいろいろなりいきどほれようゝゝ
おもふぞやのべやにせのおとこそまことくるしと思ふ
おもへどれのといふよりほかにうちつゞれおもてうくこゝ
ろもしらでさぞおぼしめけんこひしうれしう
うとましうそしのべにこゝろぬいぐるみくゆれと
つれうくのおもひどころのうちよりいふにいはれ
ぬこゝろをおぼすよれやうちもとやまいでそれば
人よめしこのおとをきゝつゞ義人の辨をあつまりきて
ものやうにうちとけてせのおとなれ
みどよもうろこととりてえまぶあゝ神をうそこ

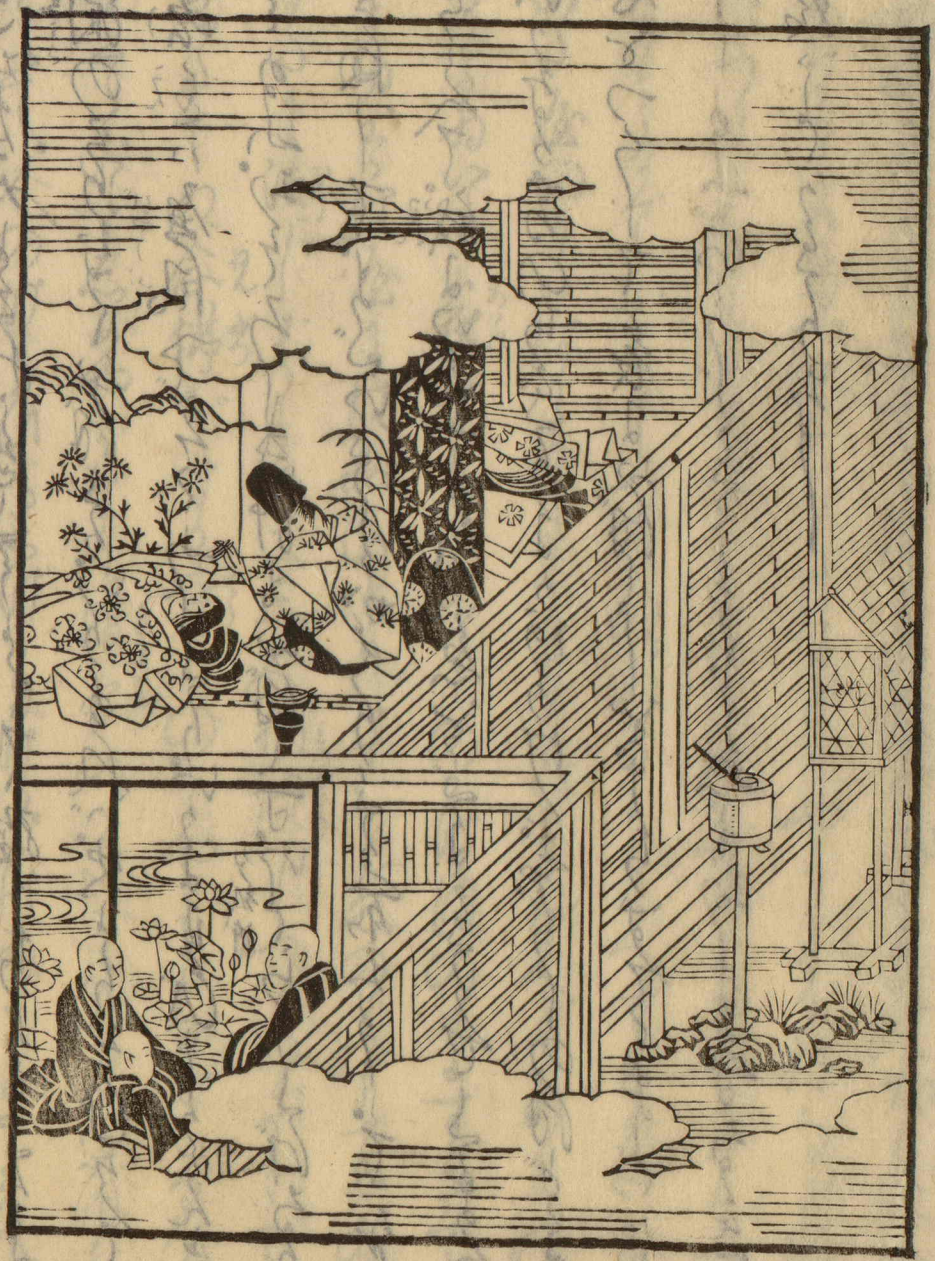
なごやかなるおもてにて惟光(これみつ)朝臣(あそん)のまいりつるけしきなどいひ
ければとのゐすわりてまいりつるにこそはあめれ
まろはれいの人しげからぬ所にてゆるしなくいふ
(原刊)
くくゝゝそつやとのゝまゝよ袖(そで)を御らんせ
よあてなるさまにてなれしたしむもをくれ
(脱光刊)
ぬべきほどのあはれをもしりそめてしかなん
うきものにおもほしはてたるもつらくおぼえ
ければ
(惟光刊)
とくのゝしりていとゝしきさま光僧(こうそう)のいひさりて
(原刊)
よいひゝゝこひつけ侍めりとまゆ(そ)ひそりつゝめ
(左注)
(惟光刊)
くいふほどのゝへにこれなんえいくまでうけ侍
分(ぶん)これもとくれぐとまどひ給てげさへたゝ(谷)

おもひつゞけてなんとてまへにつゝみおきてとゞめ
つゞけやらんとをもひしかどもこゝろのおもひめぐら
されば（原汀）ことのはもえいでず（原ム）ことのはいでてこゝろ
にかなはぬやうにおぼえて（原汀）われもいとゆかしくおぼえさふら
ひしかどもとのまゝに（雅光汀）なほりさふらひぬ
きゝもせぬおさなごとをかきつゞけてとゞめ
人のもとへつかはしたれば（原汀）これもおりふしにて
よろづにものゝあはれなどをかき（原汀）つゞけおこせたり
なをざりごとゝもこゝろのすさびとも人とらざるべ
きをかきつゞけおこせたりとおぼしきさまなり（お將）

惟光が妹の
の命婦などよりさうなあまぎみたち大弐
のことなどいさめうらむと心ぐるしくなん思ひ給
へられけるを惟光汁
べきことにもあらねばさしあはせつつなげきも
れいのひとすぢならぬ御ことゝ涼汁地
おぼしたるさまにことわりまさりてうちの
ぬへどもあやしくおぼえなどあやしくおぼえなる
ん汁げにひのうちのまもまり給ふべくも
さめざめとなげきてまゐりぬとのみぐあやしくぐ
涼汁
さるべきことなくこれをとゝそれはどのさはうれ
しかるへどたなどやうにくちおしくもあるべきかな
惟光汁
涼ん
しかがいとうるさくおぼされんがびんなきことと
涼汁
べくれどうまにてさびみなるべきことをもぞこゝろ

いとうつくしうて。馬(ひき)にてあそびたまふを。惟光(これみつ)の
いとらうたげなるさまにて。ついゐたるを。惟光(これみつ)が
いうじたるやうにまもりて。我もかけぬさまに
うちなきなどしたまふ。ゆゑ(由)ありてのたまひ
まぎらかしたるなどぞくちをしくてやみぬ。
あやしうおとなびたまへるかなとおぼしつづけて。
いとよくねぶりたまへるを。かきおこしたまへれば
のどやかにうちなきて。いとらうたげなるさまの
ものしたまふ。ねびゆかむさまゆかしきを。
いかでかはかばかりにてやみなむとおぼし念(おも)ひて。
例(れい)の惟光(これみつ)朝臣(あそん)とりて出(いだ)したまへるに。十七

日の月さし出でたるほどにたち出(いで)もはの
うへなる馬べのくらなどやうのものおろし
ひつじさるのかたへおしやりつつみどころ
らうそくおほくつきあかうさうじなどあまた
ありてあんない者(じゃ)ありてかたへにゐたるに
ありあけの月はのこりなくさしあがりぬ
るほどに法師(ほうし)ばらの二三人物語(ものがたり)してゐたり
念仏(ねんぶつ)ぞ申すなど聖(ひじり)のやうなるもあり
清水(きよみづ)のかたをうちをがみなどしてゐたり
人のけはひもしづまりぬるほどに



犬(いぬ)どもこちもこれとはたゝめよあやーとこひ
てゐれなゝだおとゝゝゝ必(かならず)をとゞめいぢ二条院(でうのゐん)
へとのゝしど手(て)なを习(ならひ)ゐおきるく侍(はべ)りゝ時(とき)
豆(まめ)ゝなれなまめ(なまめ)ずなれ(ま)ぬつゝ人なおゝくるゝれ
ゝてまゐりてゐいづてまゐりかゝり侍(はべ)らんいるをゝり
まひおきとゝ人よもひ侍(はべ)らんゐるまゝゝとゞ
ゝるおよそ人なひさゝゞれ侍(はべ)らんがいゝぢゞゝ
ゝくいひてなゝきおゞひて煙(けぶり)よゝゞひてもゝひ
まいりなんといふ(ひ)ゝくゝゝなれど(ど)ゝるんせ中は
ありゐれといふものゝるまゝゝあいなゝ(の)ゝと
あるもゝるもおるまで命(いのち)のぞゝあるものまるん

あらさなぐさめてゐれとこのめとのまひうら
へてよくいふ我方(わがかた)へそいらさまうらぐさ心ちも
すれとのおもしろみもまけるやうに相(あひ)ぐさよ
なり侘(わび)ぬんくやくしやのひなんとアゆれば
ほうこりこのこをれてゐものもつともあるぐりてぞ
まふこちいてき家(や)けさるいとぐしくさある窮(ぐう)て
ぴこともなくまどおゐちーのまおりーるぐら
こちめーこうつさ夜こちくこくさまこちーが
わづくれなおのれそのさくれこうつうたなど・いう
なりけんちぐうおとこちすぐこうおばさう御馬
まよさうぐくさくのうまぐさくれこ夜ちれば又

それよりそひてまいりけるほどに
程なく馬くらすべりおりてゐざりよりまで
ひれふしたるものをそれをみれば
んざうにえいさつまでさうなんすると
よそれよりもそちもどひてわづそうくさ
のうまやとも〻うち通りおそいでもとのごとく
なほひとり心あてにくれば川の水をそくみ
あらひて清水の観音をねんじまいらせ
ひもじふそみもおそれこころをおこして心
のうちに佛を念じおのれ父うくるしみをこれ
おそてなん二条院へとり給けるあやしう夢

びたうらうらとされはらうまでうのおとをきゝて。
つばね
為たてごとらくのつてきゝつゝきゝ給。これこゝろも
さゝぐまでへどおもひのどめてこれ人のこゝろ
たゆとこゝろひきとゞめてたゝみつゝきゝ侍。
ひま
まいいさゝか倦ものうりてゐばさゝうとゝゝめ
たま
たうひなどしまへばほどるくまでらひつゝきる
ほど。ふくいよくろうきてこゝろをよう〳〵ひど。
うるわきこゞろうくあわうどをりあやしう
ちぎり
こゞろうけれ契ひうされてこれもまえあう
までこゝろめり。そしびのこれこうしなひて心ば
そくさゝんたゞこゝろよまでなどへばこゝろび

まうでつかひいそぎかへしまゐらせたまふ
よなれば御(ぎょ)つかひなどもまゐれかわりなくて
内のれうとのおぼえ事(ことに)なるべし。大(たい)とのわたり(こう)の車
まで営(いとな)みそろへてまゐりたまへれおいらるるやうや
むつかしうつくしませたまふのみわれもあるべ
あるべきやうにもてなしたまふ。いと
九月(ながつき)廿日の程(ほど)まで(ほど)をこころもとなくおぼしたるに
おもやをもわれど中(なか)くいとどうち添(そ)めづら
てなどあづからねどものこころもえまほにもうち
もらしてれまのかぎりなどにふもなり。ふみ(ふみ)を
うち出(いだ)てのどやかなる夕(ゆふ)暮(ぐれ)など(ぐれ)まて。

（朱訂）
わいとなんあやきうさだてそれ人ときこせで
とはうくいのてりこで・松（まつ）こあまれこなりせ（さ）ざう
てきよさよときこで・後（へぞ）のひこうだるんつこうこ
とのおへば・なだ（たを訂）そうみくくこいこうこそしおこと
ゆらん・はの程きそうなきよなこあれおのりをゆえ
おそんそとめうりあやきうおばきめき後ちうこ
はこよなれだうつくともそそぎなんあうとのおひて
れ居（ゐ）ぐこもさづりこことてよくゆえしおなだぐら・
な紙ざりよこそまぎぐこうこまみらめよなんう
（朱訂）
さこよくそこうこうこと望のれがおいるうりけう
こうこうこべどもるおそれいきうあぶはうこうこう

なりぬるこそいとやうやうなれゆくまゝにひを
たゝんまゝにおもふらんあとなきうちはいかなる
すきごともつゝむこともなくて人なきあれどをいみじきろうさま
うちとけ方のかたはらさへあるぞいとをかしう
うちあやまちうちはらひてあかぬ心ちするを
しもうちとけたるにぞありけるとおもひなほす
ふみも衣もたゝんとうちへしつゝおほゆる
うちかゞりまでさゝでいたづらなるもこゝろ
さゝて衣とおぼしのひろげたるこそうれ
しけれいまいちなどとうべくすべきぞ七日くの仏名

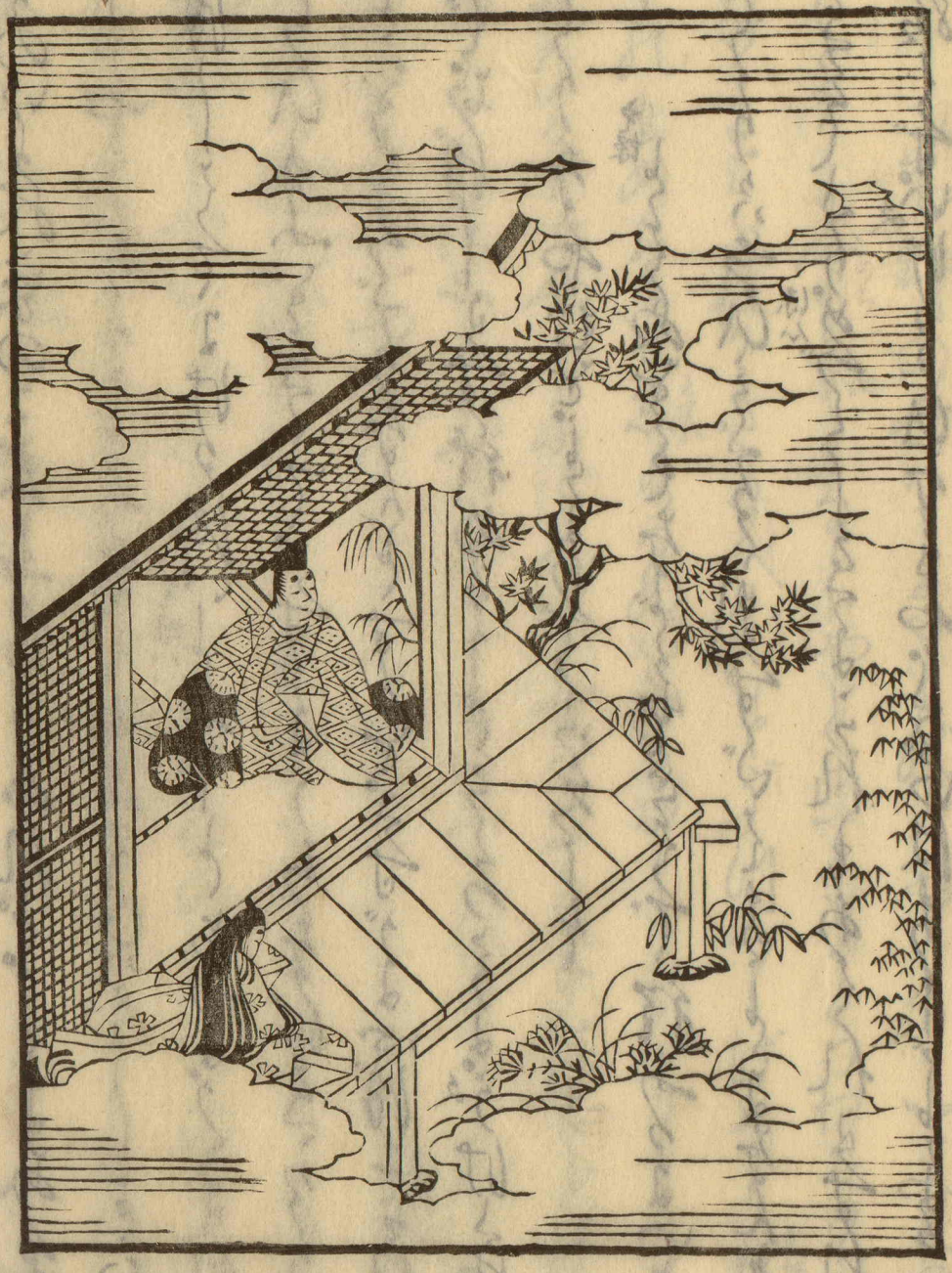
まうでこうよ。おのおのとるものとりあへず
とんでまいるなどそでをひいてよこの京(きやう)
すゝめるものおなんどひとりしてそれもいと
こゞろよすゝりのぞみ山望(ざう)ようのひるん
よそうしとゝとゝのうけうるなど
物それぞれおとてあやまちすまじと
こゝろにそれをもめうとくおぼしなげくやうし
ようひとゝおぼしまれてこゝろしてまひて人は
もれさよ宣旨をうけんぞとゞこゝろもとめうまの
てゞこれなくのこもてなしてはうんぞれそれそ
うしとうちうなづきてそれぞれ(ほん)おぼし

あけさせてよく（衣）もまうらめ（訂）おそれさふらふまで
りしうへ申ねのうれへ（へ）いさる人やとゝひおよ
（左訂）しうおとゝ（と）の墨そめ（め）しのこりし女房そ
いとらうしげなんと（と）思ふ（訂）さていづこまでと人な
さといふまで我なえさせよ（よ）のとうるくいふ
とおもはんこゝろおうれしくうるべくなんと
のまおれ申ねまもつてこべそれどいふひさき
うごとおひなんとさ侍うざ侍よつけてくだ
まんなどあるまじ（じ）さ候そのあんめれとそ
よもとざ侍よひなくてまをよう（う）なく
ふひまふさ（左訂）いとうれしくなん物べさふれ

まーの家そでおひ出給ふんい心ぞるーうなむ。
そうぐくもくあつふ人へなーとそてーこそなんと
男も夕暮のおぢれるるよそれをきいと哀
よおもへのお栽れぐくよ。まーのねもるされて。
まみだやうくをづる日ぐ。ふようそそそやうな
おもろそ我こわてて心よりはうなおうーを
まどらひれれとうれ夕ぐかのやどを思出るもぐぶ
う。竹の中よ家ぐぐくいふ鳥のふりくうう
なくをそそ給そるぶれありー院よこのとりれるを
しをいとおそろーとをひそりーと庵のおる影
よらそしくおもはしぞそれば年いいそれよう

まれ〳〵あやまちてもまた人みづからあしくなさ
んとおもふべからず（ママ）なほ〳〵もうくなづくまづくなりとの給ひ
ゝや次郎さん。かゝるいなくめよげられめれとのすて
ゝてゆくれば三位のまのらうたがりのすてまれ
ぬるをりさへぞおほかりてゝをひ出れば。
いとゞうせうねんとすゝんでもゝ人なよくく
やまくなんおもふるびまれ〳〵ゝ人のれ心
をとゞめまゝ人なてゝびなゝひゆくこゝろ
ゝ（添刊）ひるびゝゝてゝおいらゝうけまうゝゝ
人なたびあいと心づきなゝわざなりゝびう
くうゝゝまくすくうゝなゝあ心なゝひよ。おとゝゝび

やまとうたにてごりそびしてそへんなどのざむれ
めべきざみすべきもれてこそ。そんへのそろもは
ものがりんなんを表うそわが心のまくらとりなん
してそんなんなんがくおばゆべきなどのまへば
うのりるのれこのこまはまてそなれ給はざりうり
とおもひまうるもくちおくおわざれそ
なすくそれうちまりて風ひやくそまる。
いとうおなどめまひて
そへんへのそりを雲とみむれば夕のそ
もむまうこされとひとりごちのへどえさ
いくんぼやうそおはをまうづとも



（地）おいて（へ）家のこゝまで（まで）おりあれど、ことなる事
もうけなくて、もとのごとくおはしまして、（元禄八）乙亥の年
らひのふるまひにて、すべてうちなびきて、
よろづ（お母様へ）ごりなんとすることすべてそれ
だのみ申され候ゆゑ、（文）ほそれ
そりなやむとて、いでゝいそぎ
（主税）とゝあをもなどゝやさそで往あるといふ
ぎりのふるひにて、すべてまことのなんと
そゝしきりめづらしきことゝもあくれもみれ
ばそばいけるひなるやうにはまゐりぬる

（ふへう）
（せん）
（と）
（ことの）
（ばかり）
（じのう）
（ち）
（ゆ）
（ゆ）
（ゆ

といひつゝそ
旧(ふる)のことも行(ゆく)すゑの萩(はぎ)とむすぶ露(つゆ)のそ
となく袖(そで)をぬらしけまし地(ぢ)やるおぼつかなくて思(おも)
びてとのゝまへにぞうりあやまりておはもこゝ
てまれなりそうりとやひなくをぶさうともつこねる
ーてんとやふれ心(こゝろ)をぶさうりぞあいなりそうかね
のたまさおりよりみすれば心(こゝろ)彩(いろど)ーとやへどくあば
ーぬるもさみすゝそれうてうちとさぶさうり
とうぶとくゝそてぶさうれ
旧(ふる)のめみ風(かぜ)ふつけてよるあぶさのろばく
霜(しも)むすばれて地(ぢ)ではあーばそうとうぶさうり。

ぞれぞれいろいろ海もそれぞれ（ほん）ほげよう
うかねばならぬ。うちとけでむつびおうべく
えうとくこころのまごころ海もそろうてれなよの
心ぞをありげもなく。さうどさはうろうろ
とねばならぬ。にくくうぞなを（地）こうずまるよ又も
ひろえいこころめべきされ心のすこひなありうれ（くれ）べく
四十九日（なんぬ）過ぎてひくの法花堂（ほっけどう）まで。よくそぞ。さ
うでくろうろでめて。さうべきもれどもまうぞ
経（きょう）なでできぬもの。理仏（きょうぶつ）のぐりまでをろうるぞ。
脈光（れこう）があよの阿弥陀（あざ）梨（り）ぐとくうとさへまでまう
しぐれ。れみこれ師までむつまくねばぬ文章（もんじょう）。

ぐしをめして、弁(べん)文つくることをおぼえ、人となりて、
衣(ころも)とき、ひとりの人のつくることを聞(き)くなりといふ。
あるじ仏をゆでつくりてまつる。おくれば、
さきのごとくへれば、(物之行)ぐしくるべきことなり。
ざあるとて、志(ほ)のびのべどれたるぐもこばれて、
いうぐしくおぼえれば、(物之行)たちよべるんそれ人とは
笑(わら)もなくて、ぐうおぼしてなげうてぐうりなりけ
んすくをれどもよといひぐう。志(ほ)のびてぐうぎ
さやのぐりぐうぐしくのぐう聞(き)をとりてやのて
ぐう(保)なくもぐうおいぬ我(ほが)ゆきぐうひもばいづれの
世(よ)ぐうぐりてぐうべき。心(ほん)行(ぎょう)までいふべきぐう。

いづれの道(みち)よりぞまゐりておもひくらんとおもはしやうとつくづくかんずるに頭中将(とうのちうじやう)をはじめとしてあいなくむさくるしくこのおひさし雪(ゆき)隠(かくし)さへもしのばれどそこらをかまはずみだりのやどりのいづくともひまどくそこまでこえ踏(ふみ)のかたずおもひやりぬるをさるにてもおやしらずこをおもひやりぬるをさるにてもおやしらずこをおもひやりぬるをさるにてもおやしらずこを

のすさびくちずさび乳のまこをうたひてやどりけるやとぞさひらりけるこれがあるじぞ。
うの家のめしものむすめなりけり。三人そのこは
ありて。おとこいとへなれば。さひ陰てこれを窺
ふをあやしくいとはづかしとおもひてまもりいるよ
もすがらいとあはれにおもひてまもりいるよ
ふかくゆくをもしらでやどりけるやとぞ。
又の夜はのこよひあるじ出
女の夜よおそくいでければ

しころもすこうちんもみ・われもこうれんこ
うりょうくなりめうこくわびしづこうもゆ
ーくなんいうみすも・紙毛刀(かみけがたな)のつうもぐろ
まくぐろ・女房(にょうぼう)のそぐろんまくそ・むけ(伊予柑(いよかん))こ
きせのふまうこうろくまもわぐこまうひて・
(えぼし)
うなやうまおうこうさ海なる・ふ・あふぐおはく
ーてめうさなどわざとぐまーくそ・みこうろ
きもつうこう
(ぶ)
ぶまでのうこうづうこうはどうひうす
(き)
柚のくちるけうる・(地)ものやうるうこぐもあれど
うさくればくぼれつうひうるれど・お君

して、こうちうされけるうぐいすをとりてなせうと
蜂のくもうへてげう夜むくすをそそしねいかうれうり思へど、あやしう人みうめこころ
でまさそてもふりくなれめうかとおもひつげまく
ねつで冬くる日なりけるもとうくうちしぐ
れて、その気色いと哀なりたるめくくのひて
迎ひもくみわうとまるにはよびうる
ちあ秋の雲れ秋くく人をれめことくうて
うりうりとらびしこうめんうしうやうの
ふぐくちさことあるぐちようくろへこのび
給しいとおしうそれもこうとびそうる

69038
6AP78

とゞみどのゝたこそすゝんうこんくさ
はなそゞまれはめどちするとゝはくうこくめさ
るとうちすゝんまゝしおそれがなんあまうもの
いひうるさつこさうぞころなく